



6月8日（木）にオンラインで開催した「令和5年度 学力向上研修会」では、150名を超える先生方の参加のもと、学びの本質を再確認し、授業の在り方や教師の役割について学びました。講演内容の一部を紹介します。

各図は、石井先生の講演資料をもとに作成

「子供主語」の授業を目指して、グループでの学び合いや自由進度学習を取り入れていますが、なかなか学びが深まりません。

そこに学びはありますか？

授業を「子供が学ぶのか教師が教えるのか」という二項対立ではなく、**材（教材・題材・学習材）**を介した**三項の関係（三角形）**で捉えることが重要です。

授業というのは、材を介した子供と子供、教師と子供とのコミュニケーションです。

材と向き合えば学びが深くなる

主体的・対話的で深い学びが成立している

場面をイメージしてみましょう。

子供が夢中になって学んでいるとき、その視線の先にあるのは、教師でもクラスメートでもなく**材**です。子供は、材を介して対話をしています。



材と向き合い、没入することで、学びが深くなります。

石井先生

学びを深めるための教師の役割

- その教科のうまみを得られる材を考え抜き（**教材研究**）
- 材と子供たちとの出会いを工夫し（**導入**）
- 子供たちと共に**横並び（※）**でその材と対話し、時には**ナナメの関係（※）**に立ちながら、うまみを感じられる入り口をさりげなく指さし続ける。（**発問、ゆさぶり等**）

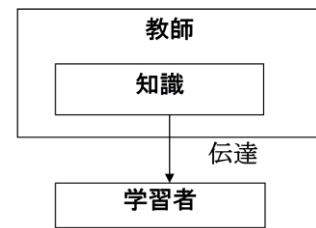
※右上「授業を『共同注視の三角形』で捉える」参照

「子供主語の授業」とは、子供が、「この時間は自分たちの時間だ」という感覚をもって学んでいる授業。

それを支える縁の下の力持ちのような教師の指導性に光を当てた**授業研究を学校全体で進めていく**ことが大切。

授業を「共同注視の三角形」で捉える

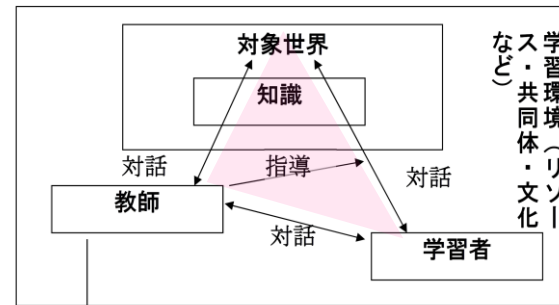
教師の知識や解釈を伝達する授業



子供の意識は、教師に向かっていきます。教師は、「みんなはどう考えたの？」と尋ねますが、求めていた発言が出たところで指名をやめます。

こんな授業を続けていると、子供は、教師がもっている「正解」を探るようになります。

子供と教師、子供同士が共に材に挑む授業



学習環境のデザイン

「共同注視の関係」

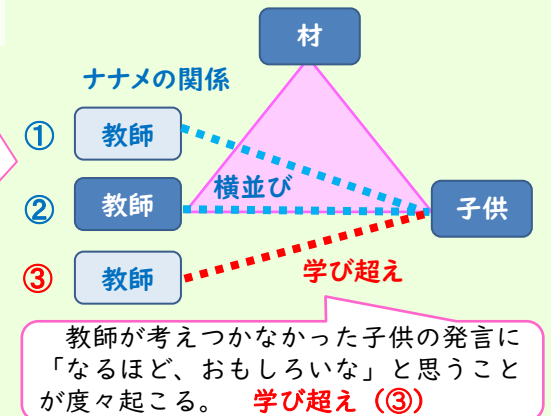
子供の意識は、対象世界に向かっていきます。教師は、子供と横並びで同じものを見て対話します。

子供が教師を学び超える

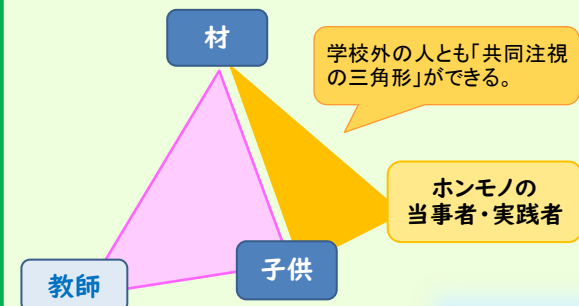
単元の導入では・・・

子供を材に誘う
ナナメの関係（①）
子供が材に没頭すると・・・
横並び（②）

時には・・・
子供が見落としている
「隙を突いて」ゆさぶる
ナナメの関係（①）



授業外、学校外でも追究する



子供の学びは、学校の外へと広がり、ホンモノの当事者と一緒に材に向かいます。子供は、正解のない課題に立ち向かい、生きることを豊かにしていこうとします。

授業とは、学びへの導入

実生活で「使える」学力を身に付ける

●下の問題は、それぞれ、どんな**学力**を測っているのでしょうか。

(1) $35 \times 0.8 = (\quad)$

知っている・できるレベル

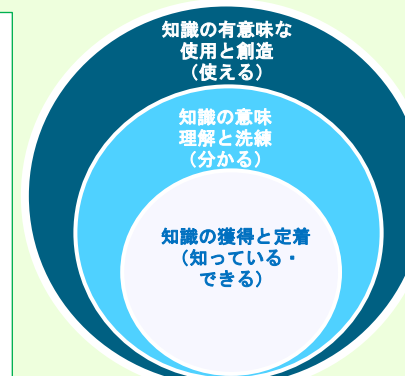
(2) 計算が 35×0.8 で表せるような問題（文章題）を作りましょう。

分かるレベル

(3) あなたは部屋のリフォームを考えています。あなたの部屋は、縦7.2m、横5.4m、高さ2.5mの部屋です。今回あなたは床をタイルで敷き詰めようと考えています。お店へいったところいいのが見つかりました。そのタイルは、一辺が30cmの正方形で、一枚90円です。お金はいくら必要でしょうか。途中の計算も書いてください。

使えるレベル

学力の三層構造



注目ポイント：「使える」円の中に「分かる」「知っている・できる」円

- ・ 単語を全て覚えてから文章を読むのではなく、文章を読んでいく中で使える単語が増えていくように、**知識を使う活動の中で知識の意味の学び直しや定着も促されます。**
- ・ 単元末や学期の節目に、**「使えるレベル」の課題に取り組む機会を設定することで、目標をもって学ぶことができます。**教科書もそのようなつくりになっています。

参加者の声

教材に没入して学ぶ子供の「深い学びの姿」がイメージできました。教材と子供を捉える「教師主語」の授業研究をしっかりと、「子供主語」の授業づくりをしていきたいです。

授業について原点に立ち返って考える機会となりました。学習者が教師の教材研究を超える発言をする「学び超え」の瞬間が授業の面白さであると思います。

試合があるから練習をがんばるように、学びの舞台を設定し、生徒が「学んだことを使えた喜び」を感じることができる単元設計をしていきたいと思っています。